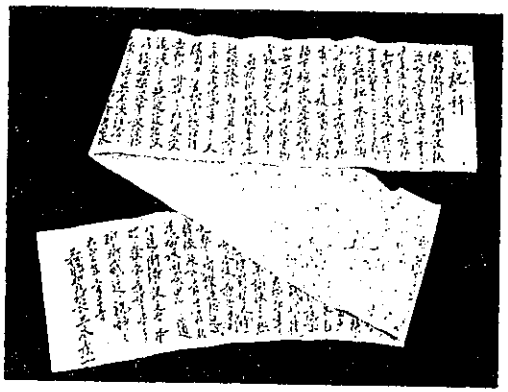
(九) 鉄道

明治二十九年（一八九六）徳島鉄道株式会社が創立され、同三十一年二月十六日徳島県で、はじめて、徳島―蔵本間と府中―西麻植―学島間、同十二月二十三日学島―湯立間が開通し、三十三年八月八日湯立―船戸間が完成した。この鉄道は国有鉄道法によって、明治四十年九月一日国に買収せられた。

船戸（川田）―池田間の鉄道敷設工事は明治四十四年（一九一一）十二月、完成したのは大正三年（一九一四）三月二十五日であった。徳島―蔵本間が開通してから、十八年を経て、やっと徳島本線全線が開通したわけである。待望久しかった。三好郡民ことに沿線の人々にとっては大きな歓びであった。

開通の日（三月二十五日）池田町で開通式が挙行された。式に列席した加茂村長三木彦一は郡を代表して祝辞

の中には過去の経緯や将来池田を中心とする十字形鉄道建設の必要を訴えている。その頃すでに、今の土讃線開通を待望していたことがわかる。その祝辞の全文をかかげて、当時の模様を伝えてみよう。



祝　辞

徳島線川田、池田間官設鉄道布設工事竣功ヲ告ゲ本日ヲ以テ汽車初メテ開通セラル茲ヲ以テ本町主催トナリ開通式ヲ挙行セラル豈ニ祝賀セズンバアル可カラズ抑モ吾ガ三好郡ノ地タル本県ノ西北隅ニ位シ徳島市ヲ去ル十有余里北ハ香川、西ハ愛媛、南ハ高知県下ニ境シ山脈畳々嵯峨タル山岳ハ高ク聳エ為メニ三県ノ貨物産物ノ輸出入人肩馬背ニヨリシガ四国新道ノ開鑿其他道路改修ノ為メ荷車ノ便ヲ得ルモ未ダ交通完然ト云フベカラズ又徳島市ヘ貨物産物ハ往時ハ吉野川ノ舟楫ニヨルノ外更ニ交通ノ便ナカリシガ輓近道路改修橋梁架設等ノ設備弥々備ハレルヲ以テ其ノ不便往昔ノ比ニアラズト雖モ偶々降雨出水等ニ際セバ道路ヲ破壊シ橋梁ヲ流失シ交通杜絶貨物ヲ停滞シ其困難ト打撃ハ収挙ニ遑アラズ故ニ池田辻町否ナ吾カ郡民一同ハ文明ノ利器タル鉄道ノ布設ヲ渇望スル事大旱ノ雲霓ヨリ以上ニシテ今ヤ帝徳四海ニ洽ク津々浦々ニ至ル迄聖恩ヲ辱シ文明ノ恵沢ニ浴シ交通機関ノ完備セサルナキニ至ル然ルニ不幸ニシテ吾カ郡ハ此ノ恵沢ヲ蒙ルコト遅キヲ遺憾トシ吾カ県郡当局者ハ業ヨリ有志一同ハ多年東奔西走寝食ヲ忘レテ中央政府ニ或ハ貴衆両院ニ懇願シテ鉄道布設ノ速成ヲ訴ヘシカ宴ニ通信大臣ノ一度船戸以西ヲ巡視セラル、ヤ鉄道布設ノ必要ヲ認識セラレ議会ノ協賛ヲ得テ大正元年初夏建設事務所ヲ徳島市ニ設置シ着々工事ヲ進行セラル。所長其人ヲ得監督周密其宜敷ニ協ヒ職員諸氏ノ職務ニ忠実励精ナル結果予定工事ヲ完了シ嶙々タル列車ハ轟然トシテ走リ笛声耳ヲ貫キ吹キ残ス黒烟天ヲ破フノ光景ヲ視ル自今以後本郡ノ産業発展商工業ノ殷盛ハ期シテ待ツベキナリ為メニ吾郡ノ天地モ欸ヒ草木モ抃舞ス豈ニ愉快ナラズヤ然リト雖モ隴ヲ得テ蜀ヲ望ムハ人情、常ナリサレバ今後ノ希望ハ本町ヲ起点トシテ阿讃連絡ノ速成ト幹線ヲ延長シ茲ニ十字形鉄道ヲ布設シ四国ノ中心トシテ四通八達ノ街路ヲ設ケ益々本町ノ発展ヲ希望シテ止マザルナリ聊カ所感ヲ述ヘテ祝辞トス

大正三年三月二十五日

三好郡加茂村長　三木彦一

各駅の乗客及び取扱貨物調

駅名	年度	年内乗客		貨物小荷物		備考
		人員	運賃	トン数	運賃	
		人	円	トン	円	
江口駅	大正6年	29,455	8,709	2,745	4,538	統計は村役場三庄台帳による
	大正11年	56,451	20,434	3,988	9,826	〃
	大正15年	111,578	23,030	2,772	7,303	〃
	昭和7年	59,601	15,301	4,675	9,205	〃
	昭和11年	57,594	18,512	4,481	8,200	〃
	昭和25年	192,277	—	—	—	統計は県徳島営業所による
阿波加茂駅	大正11年	77,520	20,056	25,245	42,000	統計は村役場加茂台帳による
	大正15年	83,780	19,678	2,476	5,337	〃
	昭和7年	61,696	15,197	1,474	4,521	〃
	昭和11年	66,900	162855	2,237	6,605	〃
	昭和25年	230,856	—	—	—	統計は県徳島営業所による

本町には開通と同時に、江口駅と阿波加茂駅が設置され、営業を開始した。昭和三十六年十二月十五日江口駅と阿波加茂駅の中間、中庄八幡神社前に駅員無配置駅ではあるが三加茂駅が誕生して、利用客の利便を与えている。

旅客、貨物の取扱状況は別表のとおりであるが、最近では、一般客は漸減の傾向にあるようである。これは自動車利用が急激に増加したためで、これを江口駅についてみると、次のようである。

一日平均乗降人員と運賃収入

昭和二十五年　一、二一六人　一四、八八九円
昭和四十三年　一、一五〇人　五一、九八八円

貨物関係についてみると、戦前は木材、鉱石

等の貨物が相当量あったが、戦後はこれらの物資が減少して、江口駅では、昭和三十五年三月九日貨物取扱が廃止された。

1　阿波加茂駅

明治のころ当駅のある三好郡三加茂町から徳島へ行く場合歩くことは別にして交通機関といえば吉野川を上り下りする帆かけ船が主力だった。県西で切り出された木材はすべてイカダに組まれ、三日がかりで徳島へ運ばれたという。それが大正三年レールが敷かれて人里はなれた田んぼの真ん中にこつ然とステーションが建設されたくましい（いま考えればおもちゃのようなものが……）汽車が蒸気を吐きながら勇ましく走りだしたのだから人々はたまげた。まさに汽笛一声文化果つる地に文明がころがり込んできたようなものである。遠くの住民は朝から弁当持参でやってきて「これが話に聞くおか蒸気かー」と終日ながめ入ったという。また大金?を出して乗車するときはゾウリをぬいで片手でさげ駅員に深々とおじぎをして乗せてもらったーというのはマユツバものにしても、静かな村を揺り動かした特筆大書すべきできごとであったことはたしかである。

阿波加茂駅

町観光協会が国鉄とタイアップしてはじめた東祖谷山村深渕にテント村を開設した。深渕までは駅から約十八キロあり、タクシーをご利用願っているが標高千メートル余りもある上近くには春の木尾ダムの人造湖があり、避暑にはもってこい。そのうえアマゴやマス釣りも楽しめる。テント二十張りがあるほか臨時電話も特設してある。家族連れに、職場グループに確信をもっておすすめしたい。駅の構内に営業開始と同時に植えられた赤松が五本あり、駅の盛衰を黙って見てきたが、さらに通学生の乗降する姿をながく見守ってくれることであろう。（筆者は佐藤寛太郎駅長）

2　三加茂駅

車内放送の「つぎは三加茂駅でございますー」というアナウンスを聞いて「ハテ、そんな駅があったかなー」ときょろきょろ周囲を見廻す人があるが江口駅と阿波加茂駅のほぼ中間にあたる駅員無配置の小駅が当駅、町名をとり入れたこの駅は、昭和三十五年二月以来町民の総力をあげての設置運動が当時の矢山四国支社長（近代化を図るために大量のディーゼル気動車を導入し列車の大増発を推進していた）心を動かし三十六年十二月十五日町民待望のうちに誕生したものである。開業当時は一日わずか二往復の停車という閑散なものだったがその後熱心な陳情もあって列車の停車回数は次第に増加した。また待合所も新設されるなど駅としての格好が次第に整備されてきた。

三加茂駅

当駅には、開業当時から美しい奉仕のグループがある。三庄小学校の地域子供会がそれで、それぞれほうきやかまを持ちよって先生や父兄たちといっしょに清掃や花壇づくりに汗を流しているのも「自分たちの駅は自分たちできれいにしょう」と労力奉仕しているわけだが、四国支社長もその立派な行為に対して感謝状をおくったこともある。ともあれ、この駅は多くの人達から愛され利用されているが、とくに約百五十人の通勤通学者にはなくてはならない駅になっている。一日上下七回の停車は多いといえな

いがこれからも地域の人たちによっていつまでも親しまれることは間違いないと思っている。

（筆者は工藤明男江口駅助役）

3　江口駅

大正三年三月二十五日阿波池田―川田間開通と同時に営業を始めた。当駅は三好郡三加茂町三庄地区と三野町の表玄関で、南は四国山脈の剣山三嶺など男性的な山々につづき、北は眼下の吉野川の清流をへだてて讃岐山脈の南斜面にある三野町を一望におさめることができる。駅構内に百本を越す桜の木と数十本のツツジ、サツキ、バラ等そして手入れの行き届いた松やいろいろの草木があり、また自然石を利用した駅舎とホームをつなぐモダンな石段とその西側には色とりどりのコイが百匹以上も遊泳する池がある。

江口駅

自然の地形をうまく生かした長さ十二メートル、幅二メートルのこの池には噴水もあり、時間待ちするお客さん達の目を楽しませている。この池は昭和三十六年秋に完成したもので、時の駅長が発案し八人の駅員とこの駅から通勤する職員三十人が出し合った二万円の費用と三加茂町三庄の土建業者から贈られたバラスや砂、山石などを利用して駅付近の住民延べ六十五人が勤労奉仕をして仕上げたもので町内有志の方々のご協力には頭の下がる思いである。

昔、この地方は交通の要所でもあった。讃岐の金刀比羅参りをする人は三野まで吉野川を舟で来て一晩泊まり、早朝山を越えてお参りしたという。讃岐山脈を越え、塩入―満濃池のほとりを通って金刀比羅まで二十キロあまりで、昔の人が歩いて日帰りするには一番の近道であった。そのためこの三野は〝こんぴらさん〟の門前の宿場として栄えたといわれている。現在三野町とは二本の潜水橋で結ばれている。年間延べ二十日ぐらいは出水のため橋が川底にもぐって交通がしゃ断されるが関係者の非常なご努力によって駅前と三野町を結ぶ東三好橋の建設工事が本年度完成をめざして急ピッチで進められている。完成のあかつきには当駅を利用されるお客さんもぐっと増加することと思われる

（筆者は谷本末広江口駅長）